

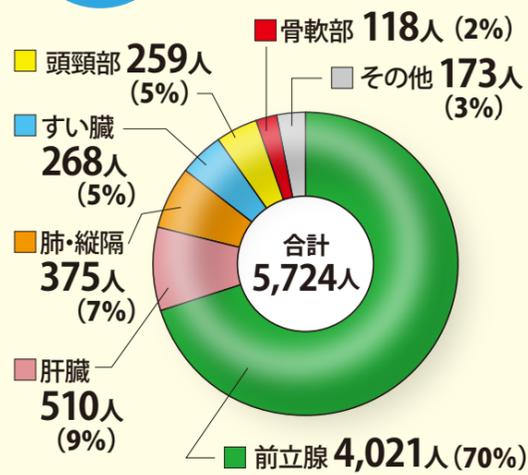
データで見るサガハイマツト

(2021年3月末日現在)

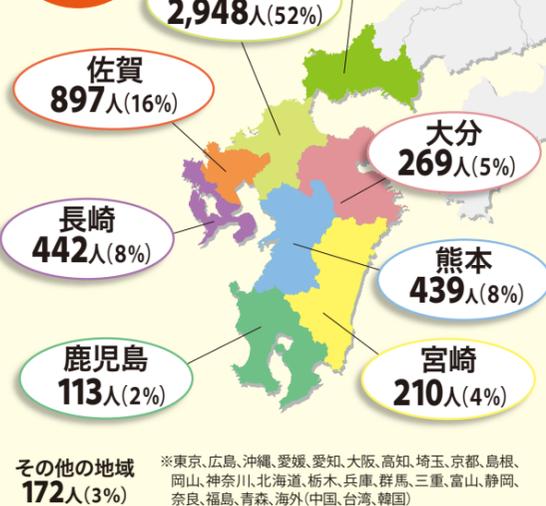
サガハイマツト年度別患者数



部位別患者数 (累計)



地域別患者数 (累計)



●寄附をお願いします●

佐賀国際重粒子線がん治療財団では、引き続き皆さんからの寄附を募集しています。県内、ひいては九州のがん医療の充実につながるサガハイマツトへのご支援をよろしくお祈いします。

なお、当財団へご寄附をいただいた方には、特定公益増進法人に対する寄附として、税制上の優遇措置があります。詳しくは、当財団までお問い合わせください。

サガハイマツト通信 Vol.31

(2021年4月号)

【お問い合わせ】

発行 公益財団法人 佐賀国際重粒子線がん治療財団 (担当)本村
 所在地 〒841-0071 佐賀県鳥栖市原古賀町 3049 番地
 TEL 0942(81)1897 FAX 0942(81)1905
 HP <http://www.saga-himat.jp/>

サガハイマツト通信

Vol.31

(2021年4月号)

2020年度治療患者数 過去最多の1131人



CONTENTS ●中川原 章 理事長 インタビュー
急速な時代の変化をいち早くとらえ将来へつなぐ

●データで見るサガハイマツト
・サガハイマツト治療患者数の推移
・部位別患者数と地域別患者数



サガハイマツトは、九州国際重粒子線がん治療センターの愛称です

サガハイマツトの受診に関する相談窓口

電話 0942-50-8812
(受付時間:平日の9時~17時)
メール saga-himat@saga-himat.jp

九州国際重粒子線がん治療センター(サガハイマツト)

2020年度患者数 過去最多の1131人に

中川原理事長 インタビュー

九州国際重粒子線がん治療センター(サガハイマツト)を運営する佐賀国際重粒子線がん治療財団は2010年2月に設立されました。これまでサガハイマツトを取り巻く環境は急激に変化しましたが、運営は順調に推移しています。これまでの状況と今後の展望について、中川原章理事長に聞きました。

急速な時代の変化をいち早くとらえ将来へつなぐ

■中川原理事長就任から5年がたちました。振り返っていかがですか。

十時忠秀前理事長の後を引き継ぎ、2015年6月から2代目の理事長として就任しました。

サガハイマツトが治療を開始したのは2013年8月から、当初はパッシブ照射という方法で、前立腺、頭頸部、骨軟部のがんを対象に、治療室Bで始めました。呼吸に合わせて照射できるので、呼吸によって動いてしまう肺、肝臓、すい臓がんにも適用できました。翌年、同じパッシブ照射ができる治療室Aでも治療を始め、多くの患者さんを受け入れられるようになりました。

2016年に骨軟部腫瘍の重粒子線がん治療が公的医療保険の適用となり、重粒子線がん治療の有用性が認められた形になりました。2018年には前立腺がんと頭頸部がんも公的医療保険の適用となり、全国の重粒子線がん治療施設において患者が増加しました。ちょうどこのタイミングで、サガハイマツトでは、がん組織を塗りつぶすように照射するスキャニング照射方法を備えた治療室Cを稼働したことで、患者さんを受け入れる体制は十分に整ったと思います。2018年以降は、毎年患者数が増えていき、2020年度は前年度の1052人を上回る1131人となりました。

この5年を振り返ってみても、時代は急激に変わるということを実感しています。どんな状況になっても臨機応変に対応していける力を蓄えておかないと乗り切れないということです。サガハイマツトは、元々九州の産・学・官の協力で立ち上が

りましたが、これからもわれわれはその期待に応えていかなければなりません。

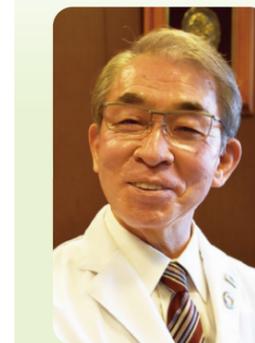
■新型コロナウイルス感染拡大による影響はいかがでしたか。感染防止策など教えてください。

サガハイマツトはJR新鳥栖駅の目の前にあり、患者さんはいろんな地域から来院されています。福岡市や久留米市など県外から来られる人も多く、新型コロナウイルスの感染が拡大し始めたころから対策にはとても気を使いました。外来の玄関口への検温カメラ、低濃度オゾン発生装置の設置をはじめ、スタッフも「絶対に新型コロナウイルスを内部に持ち込まない」という強い意志のもと、検温、手洗い、手指消毒、マスク着用はもちろん、



◀▲外来の玄関口に設置している検温カメラ(左)と待合エリアに2カ所設置している低濃度オゾン発生装置

家族に発熱者がいたら休むということ徹底しました。また、来院予定患者さんの発熱の有無などを事前に確認



佐賀国際重粒子線がん治療財団理事長

中川原 章氏

なかがわら・あきら

九州大学医学部卒。千葉県がんセンター長を経て、2014年4月、地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館理事長に就任(18年3月まで)。15年6月から公益財団法人佐賀国際重粒子線がん治療財団理事長に就任。鳥栖市出身。

することも徹底しました。おかげで今まで患者さん、スタッフともに感染者は出ていません。今後も、気を抜くことなく予防に努めたいと思います。

コロナ禍が与えた影響で気になっているのが、全国的にがん検診受診者が減っていることです。がんを早期に発見し、早期に治療を受けるためには、がん検診が何よりも大切です。発見が遅れてがんが進行した状態にならないよう、コロナ禍にあっても定期的ながん検診を受診していただくことが重要だと思います。がん治療は、重粒子線治療を含め初期の方が治療の選択肢もあるし、治りやすいものです。ぜひがん検診を受けて早期発見につなげてほしいと思います。

■重粒子線がん治療に当たって、今までに力を入れてきたことは何ですか。

重粒子線がん治療は、日本をはじめ、世界でも韓国や台湾、中国、アメリカなどに広がりつつありますが、日本の重粒子線がん治療は世界の最先端を進んでいます。治療対象部位の一部が公的医療保険の適用になったのも治療の有用性が評価されたからですが、保険適用となっていない他の部位についても早期に保険適用となるよう明確なエビデンス(科学的根拠)を出していく作業を現在行っています。

サガハイマツト設立当初から力を入れてきたのが、治療対象部位ごとの検討班会議です。現在、八つの部位ごとに班をつくり、例えば九州内の大学や病院の外科、内科、病理の専門の医師などにも

入ってもらい、診療科や病院の垣根を越えて意見交換をし、患者さんにより良い治療の提供を行うことを目指しています。

また、九州・山口での広域医療連携も開設当初から大切にしています。これまで患者さんを紹介いただいた医療機関は1000を超え、病院の主治医の先生とは深い信頼関係を築き、より良質で安心できる治療を提供しています。治療は医師、看護師、診療放射線技師などあらゆる立場のスタッフがチームとなって動いています。患者さんは、治療が終わったらそれっきりではありません。治療後の経過などについても、紹介元の医療機関の主治医の先生や患者さん本人に確認するなどして、長期的なフォローも行っています。

■今後の展望は。

これまでを振り返っても、時代の変化の速さ、技術の進歩には目まぐるしいものがあることを実感しています。変化の速さを念頭に、今後も中・長期的に考えていく必要があると思います。どんな変化にも対応できるようにすると同時に安定した運営にも努めなければなりません。その中で、医師、診療放射線技師、看護師などのスタッフを計画的に増員するなど、体制の強化にも取り組んでいく必要があります。また、患者さんによりよい医療を提供するためには、ここで働くスタッフが働きやすい職場環境の改善にも努めないといけません。時代の変化を見据えながら計画的に進めていきたいと思っています。

技術は日進月歩と言いましたが、次世代の重粒子線がん治療とも言える「量子メス」(より小型で、炭素イオンを含むマルチイオン照射)という新技術が、千葉県の量子科学技術研究開発機構(旧放医研)で研究開発中です。

このように新しい技術がどんどん出てくると同時に、今回のコロナ禍のように社会情勢も予想外の速さで変化します。変化を敏感にとらえながら、今後も地域や患者さんの安心につながる医療の提供に努めていきたいと思っています。